石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第365号　平成26年3月1日発行

特別陳列

生誕100年 截金（きりかね） 人間国宝

西出大三 －平安の美を求めて－

截金桧合子「摩尼」　西出大三

■ 前田家の天神信仰 －天神画像と文房具－

■ 刀剣の美

■ ムナカタとオモテ

■ 春を待つこころ

- 近現代工芸 今月の展示室
- 3月の企画展示室
- 今年度の企画展を振り返って
- 企画展Topics
- 所蔵品紹介

棟方志功　「照見の棚」

表立雲　「過」

特別陳列

生誕100年 截金（きりかね） 人間国宝

西出大三 ―平安の美を求めて―

2月15日（土）～3月21日（金・祝） 会期中無休

第5展示室

西出大三氏の木彫截金作品は、小動物をかたどったものが多く見られますが、中でももっともモチーフとして多く作られたのが鳥です。母の形見であった加賀張り子の、ぽってりとした愛らしい形をベースに、さまざまな鳥の作品を生み出しました。

実生活でも多様な種類の鳥を飼い、少し足を伸ばせば、鴨や鴛鴦、雁などを見ることもできた環境の中で、西出氏はこれらの鳥たちをじっくりと観察したのでしょう。作品はいずれも巧みな造形力によって、生き生きとした魅力にあふれています。

昭和三十七年の日本伝統工芸展出品作「截金彩色鶏の合子」は、桧の素地を生かして花模様の彩色と截金装飾を施した作品です。体をぐっと伸ばし、上を向いた鶏の姿はどこかユーモラスで、蓋を動かすと内蔵された鈴の音が聞こえます。また金と銀の装飾が施された玉子が二つ添えられており、何とも楽しい気分にさせてくれる作品です。

対して、平成元年の同展出品作「木彫截金彩色合子 愁湖」は、平成七年にも遺作として出品された作品です。胡粉を薄く塗り、控えめな截金が散らされた白鳥は幻の鳥のようです。ところが蓋を開けると鮮やかな彩色と金の装飾が現れ、白鳥が内に秘めた生命力に気付かされます。

西出氏の截金は木彫が中心ですが、截金を用いた絵画も制作しています。昭和三十九年頃に制作された「瑞鳥」は初出品作の一つで、胡粉を塗った画面に截金と最小限の彩色で描かれたものです。この三年前に制作された「木彫截金石筥花と蝶」の、内蓋図柄を独立させた優美な姿で、慶事を象徴するにふさわしい絵画です。

これらを含む七十点の作品で、西出氏の美の世界をご堪能ください。

木彫截金彩色「愁湖」　平成元年

截金絵画「瑞鳥」（部分）　昭和39年頃

学芸員の眼

西出大三氏が東京美術学校に入学した昭和七年、木彫部の教官は関野聖雲（せきのせいうん）氏でした。前年に浄瑠璃寺の秘仏、吉祥天立像の復元模造を終えていたこの教官から、この仏像の台座に施された截金という技法だけは、復元することができなかったというエピソードを聞いて、西出氏は截金研究を志しました。今回の展示では参考資料として、きっかけとなった恩師関野聖雲作吉祥天立像復元模造、昭和三十一年に国へ提出した截金見本、称名寺本尊弥勒菩薩立像の胎内から発見された截金道具、神奈川県立金沢文庫で行われた西出氏の講演概要などを、パネルでご紹介します。平安時代の仏教美術に魅せられ、その美を自らの作品に昇華させた西出氏の足跡を作品と併せてご覧ください。

截金道具

前田育徳会尊經閣文庫分館

前田家の天神信仰

―天神画像と文房具―

2月15日(土)～3月22日(土) 会期中無休

「大宰府へ流された道真が儲けた子を原田といい、その子孫が武者修行に出かけて、前田家の婿となった」前田家が道真を祖とする所以ですが、これは後付けと考えられます。権力者が自らの正統性を主張するために「源氏」や「平氏」を名乗るのはよくある話で、前田家も利家の頃は「平氏」や「松平姓」を名乗っていました。

寛永十八年(一六四一)、三代藩主利常が天海僧正に源氏姓を名乗るように勧められますが、「前田家は菅原姓であるから」と言って断ったというエピソードがあります。後に隠居した地に小松天満宮を建立する利常は、道真が愛でた梅を家紋に定め、他での使用を禁止しました。前田家が天神信仰を明言するのは、この頃です。

そして、道真や天神信仰に関する資料収集を積極的に行ったのが、五代藩主綱紀です。尊經閣文庫には道真が編纂した漢詩文集『菅家文草』や道真の生前の実績を伝える『菅家伝』が所蔵されています。綱紀に仕え、こうした文物の収集にあたったのが、書物役の山本基庸で、鎌倉の荏柄天神社に伝わる『荏柄天神縁起絵巻』も求めています。(いずれも今回展示はありません)

さて、北野天満宮の境内には、斉泰と子・慶寧と利鬯、孫・利嗣による石碑があります。『菅家文草』中の五言律詩を斉泰と慶寧が詠み、利鬯が梅花を描き、利嗣がその由来を記したものです。建立されたのは、明治二年(一八六九)。維新の混乱の中、前田家の結束と、その正統性と繁栄を願ったのでしょう。梅が見ごろを迎えるこの時期、石碑を探しながら境内を歩くのも、オススメです。

「渡唐天神画像」月僊

第2展示室

刀剣の美

2月15日(土)～3月22日(土) 会期中無休

前回は展示の概略について述べましたので、今回は展示作品の主な見所をご紹介します。「名刀正宗」と言われるように、相州正宗は日本刀剣史の金字塔であることは誰もが認めるところでしょう。その相模の国鎌倉の地を拠点として傑出した手腕を発揮した最初の刀匠が新藤五国光です。国光は短刀の名手と言われており、今回はその短刀を最初に展示しています。この国光の弟子に行光、そして正宗がいます。そして正宗は行光の養子となったと考えられています。今回は「名作の森」で話題となった『短刀 無銘正宗』を引き続き展示しています。相州伝の特色を確立した正宗の作風をよく伝える一口と言うことができます。そして、その正宗の子、または養子と伝えられ、やはり相州伝の代表的刀匠の一人として知られているのが貞宗です。今回は『太刀 銘貞宗 号日本丸』を展示しています。貞宗と銘を切る作例が必ずしも多くないことから、作者は伝貞宗としています。

今回展示する作品の中で最も年代が上がると考えられるのは、『太刀 銘一』で景安の作です。景安は鎌倉時代十三世紀の刀工で、「一」との銘から古備前、福岡一文字派と考えられています。

そして、藤嶋友重や家次など室町時代加州刀の水準の高さを今日に伝える優品の数々や、「加賀正宗」と賞賛された初代辻村兼若などにも是非ご注目いただきたいと思います。

石川県指定文化財　刀　銘越中守藤原高平(花押)
元和七年十二月　日
初代辻村兼若　元和7年(1621)　江戸

第3・6展示室

春を待つこころ

2月15日(土)～3月21日(金・祝) 会期中無休

新年度への準備とともに、花咲き鳥歌う春が待ち焦がれる時節となってまいりました。さて本展は絵画と彫刻を交えた展示で、彫刻分野では春の情景や心情をテーマにした人体彫刻を中心に展示いたします。

代表的な作品として、得能節朗「春」、山瀬晋吾「春の音(1)(2)」、矩幸成「春を包む」などで、作品名称及び春を連想するポーズの作品が中心です。

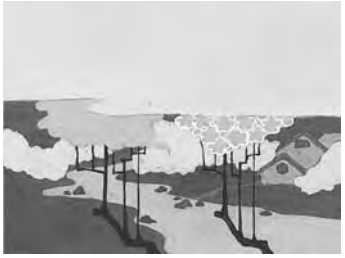
油絵と水彩・版画の分野では、前回紹介した作品の他に、高光一也の「鶴仙渓の春」や村田省蔵の「斑雪」など、昭和、平成の作品と共に、浅井忠の「農夫とカラス」や同「桜」といった明治期の作品もご覧いただきます。

浅井の「農夫とカラス」は、カラスについばまれるのを承知で黙々と種をまく農夫に、日本近代洋画の揺籃期に我道を歩んだ浅井自身の姿をなぞらえた寓意画とも見なされますが、土や緑の草、その上に見える男の勢いのある姿などからは、春の暖かさと活気を感じます。また「桜」は写実から離れ、デザイン性を強く出した浅井の水彩画です。川を挟んで桜の枝が2本シンメトリックに描かれています。京都時代の晩年の作と思われます。

また、人物画家として知られる高光ですが、「鶴仙渓の春」は、山中の鶴仙渓を大胆なタッチで、渓流と春の風に揺らめく木々の梢をとらえた明るい作品です。

この美術館だよりが届く頃、季節は春を迎えることとなりますが、美術館の展示室においても存分に春の雰囲気を楽しんでいただければ幸いです。

「春を包む」 矩幸成



「桜」 浅井忠

第4展示室

ムナカタとオモテ

2月15日(土)～3月21日(金・祝) 会期中無休

前号に続いて「ムナカタとオモテ」を紹介します。棟方志功の展示作品は、主に板画や倭画、書や知人に出した葉書などで構成しています。一方、表立雲氏の作品は、昭和二十年代から近作までの代表作を展示しています。表氏の作品は、一見すると書とは思えぬほど抽象性が強く、偶然の変化を巧みに取り入れた表現が特徴的です。制作の手法もさまざまで、色彩は墨に限定しません。自身の美意識を追求し、常に実験を続ける中で生まれた瑞々しい作品から、作者の制作の軌跡を辿れるのではないでしょうか。どんな道具を使って書かれたのか、紙の上で何が起こったのか、想像してみるのも一つの楽しみ方です。

そんな表氏と棟方志功が親交を深めたのは、棟方が福光町へ疎開していた五年余り。二人は棟方のアトリエで書画の合作を行い、表氏が開催した書家・大澤雅休(がきゅう)の講習会で棟方が揮毫するなど、書を中心とした交流を重ねました。また棟方は、福光の子供達が書く天真爛漫な書に引かれ、自ら音頭を取り「書の径(みち)の会」を結成。表氏も子供達の指導にあたりました。この福光での一連の出来事を抜きにして、棟方の書を語ることはできないと、表氏は述べています。今回の特集では、講習会場での揮毫作品であり、表氏が「これぞ棟方」と語る書「華厳」、棟方が表氏を描いた倭画「書妙菩薩出現韻」もご覧いただきます。

「書妙菩薩出現韻」 棟方志功

「華厳」 棟方志功

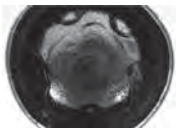
第6展示室

近現代工芸 主な展示

2月15日(土)～3月22日(土) 会期中無休

寒さもしだいに和らぎ、春の足音が聞こえてくるような時節となりました。今回の近現代工芸コレクション展では、春にちなんだ作品を中心にご覧いただきます。初春を代表する花といえば、梅でしょうか。今回展示する九代大樋長左衛門氏の《黒釉内梅花紋茶盌》は、名称に『梅花』とあるとおり、梅の花を意匠化しています。その表現は、梅の花を描いたり刻んだりするのではなく、外側面に見られる大きく垂れ下がった黒幕釉を、内側の見込みにも五か所垂らして梅の花を暗示させているのです。大樋焼独特の釉薬の美しさとともに、ゆるやかに波打つ口造りや胴部をわずかにくぼませて手掛かりとするなど、実に気品に満ちた作品といえます。

黒釉内梅花紋茶盌
九代大樋長左衛門作



見込み内部

第7展示室

第37回

伝統九谷焼工芸展

3月7日(金)～20日(木) 会期中無休

昭和五十一年に認定された石川県指定無形文化財保持団体九谷焼保存会が、技術保存・発展向上を図るための事業として毎年行っている公募展で、今回は三十七回目となります。入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

◇入場料　一　般　三五〇円(二八〇円)
大学生　二八〇円(二二〇円)
高校生以下は無料
※(　)内は二十名以上の団体料金
当館友の会会員は、会員証の提示により団体料金になります。

◇連絡先　能美市寺井町よ二五番地
石川県九谷会館
TEL　〇七六一－五七－〇一二五

第8・9展示室

能美市美術作家協会

創立10周年記念美術展

3月5日(水)～12日(水)［17時終了］会期中無休

能美市美術作家協会は、旧能美郡根上町、寺井町、辰口町の三町が合併したと同時に発足し、今年で創立十周年を迎えました。

以前より現在の能美市となる地域は九谷焼の里として、また住民は美術文化に対する造詣が深いことで知られました。工芸、絵画、水墨、彫刻、書、写真等で地域の主体性を重んじる考え方で努力し、新しい年代による伝統を独自の技法で再生発展させてきました。また自由な発想で構成し、独創的な作品制作がなされてきました。本会創立十周年を機に、六部門の会員作品八四点を県内外に公表して、会員の更なる精進と活躍を重ね、また本会の発展もめざして記念美術展を催すことになりました。ぜひご覧くださいますようお願い申し上げます。

◇入場無料

◇連絡先　能美市東任田町ハ一三四
能美市美術作家協会事務局　斉藤敏明
TEL　〇九〇－一三一七－六九二八

第8・9展示室

'13 玄土社書展

3月15日(土)～17日(月) 会期中無休

玄土社が、巨大な日展とは真逆の在野グループとなって、自由に個性的な表現を試みる創作と、一方、古典の厳密な模写(臨摸)を取り組んで、三十余年となりました。以来、一貫した私たちの活動が大きく注目され、海外展など発表の場を広げつつあります。

通算すれば四十一回目となる今年の展示は、前衛書四十三点、古典臨摸作品十五点。玄土社の一年の活動記録です。

前衛作品は、気楽に観てください。分からないけど何だか面白い、などいろいろ想像力をはたらかせて作品と対話していただければうれしいです。臨摸作品は、自己主張するものではありません。制作中に伝わった手ごたえが、作者にとって大切なものになっています。

◇入場無料

◇会期中の行事「表立雲トークタイム」
テーマ『墨』二二七号　台北故宮博物院 神品至宝に寄せて
日時　三月十六日(日) 午後一時三十分～

◇連絡先　金沢市本多町一－七－一五
TEL　〇七六－二六三－〇一二二

今年度の企画展を振り返って

平成二十五年度は、一階の企画展示室で二十九の展覧会が開催されました。その中から当館が主催した展覧会を振り返ってみたいと思います。

四月開催の「**国宝 薬師寺展**」は、当館の開館三十周年と北國新聞創刊百二十年の記念展として、初めて実行委員会形式による共同主催の展覧会となりました。二年がかりで準備を進め、奈良西ノ京の薬師寺から「聖観世音菩薩立像」など国宝六件を含む四十四件を借用し、五十九日間という過去最長の会期の展示でした。四メートルを超える大画面の「薬師曼荼羅」をロビーに展示したほか、第二展示室を国宝「吉祥天像」の展示のため特別のしつらえとし、幻想的な空間を創出しました。仏像や塔本塑像は特設の展示台を設けることによって、薬師寺のお堂内では見ることのできないお姿を間近にご覧いただきました。その結果、当館主催の展覧会としては最高の九万六千人を集め、県外からも多数の来場者を迎えました。

国宝 薬師寺展

七月には北陸中日新聞と共催で、「**エミール・クラウスとベルギーの印象派**」を開きました。本家フランスとは異なった独自の発展を遂げたベルギー印象派と、その中心人物であったエミール・クラウスを紹介する展覧会でしたが、西洋絵画の展覧会は久々ということもあって盛況でした。

俵屋宗達と琳派

九月には「**俵屋宗達と琳派**」を開催しました。俵屋宗達の後継者宗雪が加賀藩の御用を務めたことから、石川県には宗達の流れを汲む宗雪、喜多川相説やその工房の作品が数多く伝世しています。それらは当地の文化や美意識に大きな影響を与えており、本展は、地域の視点を明確にしつつ、宗達や光琳の表現世界を深く掘り下げた展覧会となりました。当館の三十周年と金沢宗達会の創立百年とをあわせて行われたこともあり、大勢の入場者を迎え、会期中の諸行事も大好評でした。

年末から新春には「**あなたが選んだ 石川県立美術館 名作の森**」を開催しました。三千点に及ぶ所蔵品を公開するにあたり、初めての試みとして、所蔵作品の人気投票を行いました。その結果をもとに展示作品を決定して、尊経閣文庫分館を除く一階・二階すべての展示室で二百七十九点を展示しました。野々村仁清「色絵雉香炉」が第一位、松田権六「蓬莱之棚」が第二位、鴨居玲の「１９８２年私」が第三位という結果でした。投票による作品展示という珍しさもあって、冬場の展覧会としては多くの来場者がありました。順位のついた作品が一階にも二階にも展示されたことで、企画展示室だけでなく、二階のコレクション展示室も皆さんにご覧いただきました。普段は企画展示室だけご覧になって帰られるお客様が多いのですが、今回初めて二階をご覧になったという方もいらっしゃって、石川県立美術館を紹介する絶好の機会となりました。

あなたが選んだ
石川県立美術館 名作の森

企画展Topics

新紀元 ー革新の視座ー

ー加賀谷武、木下晋、久世建二、庄田常章、蓮田修吾郎の創造ー

4月20日(日)～5月18日(日) 会期中無休

絵画でいえば写実を基調としたオーソドックスな人物画や風景画、工芸でいえば用と美を兼ねた、手で愛でることのできる、皿・壺・箱などの形態の作品が、『石川県立美術館 名作の森』には多くの票を得て、ランクインしていました。そうした中では異質で異彩を放っていた作家たち、鉛筆画の木下晋、陶土の造形家・久世建二、現代の浮世絵を描く庄田常章、金属造形の蓮田修吾郎この四人に、ロープを用いた空間造形の加賀谷武を加え、5つの展示室にそれぞれがワンマンショー形式で、さらにロビーやエントランスをも会場としてご覧いただくのが、春の企画展『新紀元 革新の視座』です。

今回のトピックスでは二人の作家をご紹介しましょう。

まず木下晋ですが、10Bから10Hまで22種類の鉛筆を駆使して、巨大なケント紙に深く皺の刻まれた老婆の顔や手を克明に描き出すことで知られています。画面全体が発する濃密な陰翳は見る者の心を揺さぶります。そしてその緻密な細部は写実を超えてシュールな世界を感じさせもします。

久世建二は陶土の持つ可塑性を様々な形に引き出して創作を展開してきました。《パッケージ》、《落下》、《痕跡》の各シリーズ、そしてアメリカの悲惨なテロ、9・11への鎮魂と、驕る人間への警鐘、十字架ないし人型。二人のこれまでの歩みを存分にご覧いただきます。

木下晋
102年の闘争Ⅲ　2002

久世建二
落下痕跡 9.11　ツインタワー、人型

三月の行事予定

■土曜講座　午後1時30分～　美術館 講義室　聴講無料

1日(土)	「截金 ー仏教美術と伝統工芸ー」	寺川和子　学芸専門員
8日(土)	「世界遺産を訪ねて 8」	谷口　出　学芸第一課長
15日(土)	「加賀藩前田家と天神信仰」	村上尚子　学芸主任

■ビデオ鑑賞会　午後1時30分～　美術館 ホール　入場無料

2日(日)	学問と情熱 虚空は光にあふれ… 岡倉天心 (37分)

次回の展覧会

前田育徳会尊經閣文庫分館・第2展示室

春の優品選 ー花鳥の美ー　会期：3月27日(木)～4月15日(火)

1F企画展示室(7～9展示室)
2Fコレクション展示室(3～6展示室)

第70回 現代美術展 洋画・工芸・写真　会期：3月29日(土)～4月15日(火)

待春 たいしゅん　平成2年（1990）第36回一陽展　縦162×横130.5cm　所蔵品紹介241

判　三教 ばん・さんきょう　昭和6年～（1931～）

雪景色でしょうか、白い世界の中に、葉を落とした木立と上空を舞う鳶、少女の髪が黒く描かれています。白と黒のモノトーンの世界、時間を切り取ったかのような静寂な墨絵の世界です。一方木立の生え際を境に、それより下に描かれる少女の衣服は、紺と朱と黄色、そして朱色の長靴と、対照的にカラフルに描かれます。

少女は高く舞う鳶を見つめているのでしょうか。それとも木立の小枝が見せる複雑で精巧な姿に目を奪われているのでしょうか。じっとたたずむ後ろ姿は大きな空間の中では小さくとても愛らしく、そして朱と黄色の衣服は温かいほのぼのとした思いを見る者に抱かせます。この朱と黄色の暖色が春への思いを象徴し、木立の芽吹きへと繋がっていきます。

子供にとって雪はなかなかに楽しいものでもあります。でも、餌を探して飛び回る鳥や淋しげな木立を見るにつけ、「早く春が来てほしい」と、少女は願うのではないでしょうか。叙情豊かな作品です。

作者は昭和6年能美市（旧辰口町）生まれ。金沢美術工芸大学油画科卒。一陽展に出品を続け、会員、審査員として活躍。風景の中に点景として子供や女性を描き、人が自然にとって何者なのか、どうあるべきなのかを静謐な画面で語り続けています。

友の会 手続きが始まります

三月一日（土）より、来年度友の会新会員の募集、更新手続きが始まります。お申込みは郵便振替をご利用いただくか、直接県立美術館でお手続きください。

現在会員の方も、更新の手続きをお願いします。

■有効期間　平成二十六年四月一日～平成二十七年三月末日

■年会費　二、〇〇〇円

【主な特典】

・コレクション展示室の無料観覧
・企画展の招待券進呈
・入館料の割引
・展示の詳細やその他の催し物のご案内を記載した、美術館だより（本誌）を毎月送付
・館内カフェにてドリンクの割引

新しい会員証の図版は、五十嵐道甫とともに加賀蒔絵の基礎を築いた清水九兵衛の作と伝わる、県文「蒔絵亀図鞍・鐙」です。

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　350円（280円）
大学生　280円（220円）
高校生以下　無料
※（　　）内は団体料金
毎月第１月曜日はコレクション展示室無料の日（3月は3日）

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

3月の休館日
23日（日）～26日（水）

石川県立美術館だより
第365号〈毎月発行〉
2014年3月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町２番１号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

広告
毎週水曜日は
Meiカード ポイントプラスデー
Meiカード通常ポイント ＋ 3% ポイントプラス
※催事場、地階食品売場などやご奉仕品は、通常通りのポイントとさせていただきます。詳しくは売場係員におたずねください。
MEITETSU MIZA めいてつ・エムザ
金沢 むさし TEL(076)260-1111(代)
www.meitetsumza.com
10時→19時30分（地階レストラン街・書籍は21時まで）